

日本の小学生における英語の音韻認識の発達に関する調査・研究

瀧沢広人(岐阜大学 教育学部 准教授)

1 研究の背景

小学校5・6年生の外国語から、英語の「読み・書き」が始まる。「読み・書き」については、小学校学習指導要領(平成29年度告示)において、小学校3・4年生でアルファベット文字の認識、5・6年生でアルファベット文字や語句、文の読み書きを行うこととなっている。英語の「読み・書き」には、音素認識能力が欠かせないと言われる(National Reading Panel 2000)。また、音素認識能力を含めた音韻認識能力は、大きな単位から小さな単位へと発達が進むこともわかっている。では、日本人小学生も大きな単位「文」から「単語」「音節」「オンセットライム」「音素」の順で、英語の音韻認識を発達させていくのだろうか。筆者らは、各音韻認識同士の関連性を調査し、小学校英語教育の読み書き指導のための基礎データを提供する。

2 研究方法

予備調査を経て、本調査(音韻認識能力の調査)、本調査2(音素認識能力の調査)を行う。本調査1では、5つ(文、単語、音節、オンセットライム、音素)の音韻認識能力を測り、共分散構造分析により、日本人小学生の音韻認識の発達モデルを提案する。本調査2は、音素認識能力について、ターゲットとなる音素の位置により、音素認識の習得及び困難度を調査する。

3 結果・成果

本調査1は、公立小学校2校(計375名)、私立小学校1校(216名)で実施した(令和3年11月~12月)。5つの音韻認識能力(文、単語、音節、オンセットライム、音素)を測った。信頼性係数は $\alpha = .728$ であった。共分散構造分析により、日本人小学生の音韻認識の発達モデルで確認した(図1)。オンセットライムを音韻サイクルの外に出しモデル図を作成した。データとモデルの適合度はおおむね満足できるレベルである。 $(\chi^2(4) = 6.86, p = .143; GFI = .995; AGFI = .983, CFI = .987; SRMR = .026; RMSEA = .035; 90\% CI [.000 .024])$ 。本モデルにより、文→単語(.40)→音節(.20)→音素(.04)というように音韻認識に影響を与えていることが確認された。しかし同時に、文→音素(.32)も直接的に高い影響力を与えていることから、英語に触れている時間が少ない日本人小学生は、英語母語話者の音韻認識の発達とは異なる発達ルートでも音素認識を行っているものと考えられる。つまり、母語である日本語の音韻(モーラ)で、英語の音素を認識している。またこのことは同時に、通常(週1~2回)の英語授業を受けているだけでは、英語母語話者の辿るような音韻認識能力は、自然には身につかないことを示すものと考えられる。

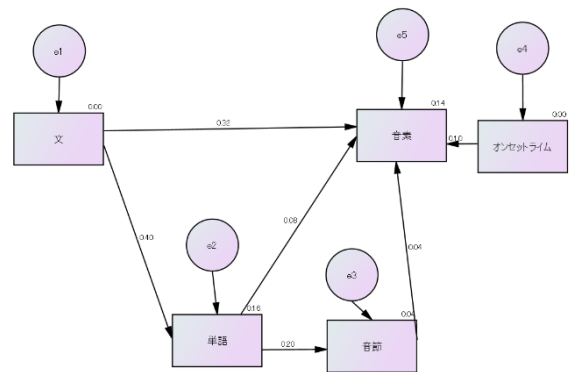


図1 日本人小学生の音韻発達モデル

本調査2は、公立小学校1校(438名)で実施した(令和4年2月)。音素の位置により、音素認識の習得及び困難度を調査した。単語は全て非語を用いた。信頼性係数は、「語頭」($\alpha = .787$)、「語中」($\alpha = .428$)、「語末」($\alpha = .714$)となった。正答率は、「語頭」が一番高く、「語末」よりも「語頭の音素の聞き分けが容易である」ことが確認された。語末音は、はっきり発音されないことが多いことから聞き分けが困難であったと考えられる。

4 課題

音素認識が読み書きの能力に影響を与えることから、音韻認識能力の最終的なゴールは、音素認識能力を育てることである。本調査では、特別に音韻認識育てる学習を受けた児童でなかったため、「音節」や「オンセットライム」の理解は十分でなかったかと考えられる。そこで、もし、「音節」や「オンセットライム」の学習介入のある小学生と、介入のない小学生とで比較し、音素認識能力に影響の差がみられるかどうか、両者の影響の度合いをモデル図で確認できれば、日本人小学生にとって必要な音韻認識能力が見えてくると考える。さらに、今回用いた調査問題を改善し、より信頼性を高めていくことも課題とである。

《共同研究者 土平泰子(聖徳大学 語学教育センター 准教授)》

<参考> National Reading Panel (2000). Report of the National Reading Panel: Teaching Children to Read